

THE ORK MAN IS HERE

オークマン参上

株式会社村上衡器製作所

代表取締役

村上 昇氏



一般計量士の資格を持つという村上さん。社内には3人同資格を持つ人がいるという。

あくまでも質量の計測を軸足に 限りなく絶対値に迫る この分野に挑戦し続けたい

創業は明治39(1906)年。今から114年前に
現社長の曾祖父にあたる初代村上佐助氏が
大阪市福島区で農商務大臣から衡器の製作免許を受け
分厘桿秤専門の製作を開始した。
佐助氏は明治22(1889)年には京都にあったという秤座に
技術見習いに入所していたといわれ、それから数えると
秤に関わってからなんと131年になる老舗企業である。
現在地には企業疎開で戦時中に移転。戦後、昭和23(1948)年に
祖父に当たる2代目佐助氏が株式会社を設立している。
今回はそんな歴史ある企業を最も若手の中野広報委員が取材。
誤差ゼロの世界が精緻な技術力によって達成されている現場に
大いに興味を持ったようだ。



昭和2、30年代に作られていた等比基準天びん。当時は家具職人も社内にて、天びんを納めるケースも自社生産していた。最大20kgまで測定可能。

世の中に計る場面は 数多く存在する。 これはビックバン的世界。

——創業されて114年になると伺いましたが、当時と今とは社会の情勢も御社の事業も大きく変わったのでしょうか。

村上 創業は1906年。明治39年に当たりますが、この前年に日露戦争が終結し、日本も海外へと目を向ける時代に入っていたと言われます。当社は私の曾祖父が上皿天びんなどの質量計測器、いわゆる秤(はかり)の製造を手掛けたのが発端です。その間、一世紀余り、世の中の情勢は大きく変わりましたが、「質量の計測計測器に関わるメーカーである」という当社の姿勢は一貫しています。最近ではコロナ禍でありとあらゆるところで体温測定が常態化していますが、質量に関しても計る場面は世の中のあらゆる所に数多

くあります。そこに早くから目をつけた曾祖父の勘はまさにビックバン的な大変革に繋がる取り組みだったと感じています。

——今回のコロナ禍の影響は大きかったのですか。

村上 いえ、一貫してメーカーとしての姿勢を崩さずにやって来たので、お客さまも含めてダメージはほとんどありませんでした。工場は止めることは出来ませんので非常事態宣言の時には社員全員を車通勤としました。労働環境がガラッと変わったということもなかったですね。

——上皿天びんは小学校で使った覚えがあるのですが、学校向けの秤も手掛けていらっしゃるのですか。

村上 当社の製品のほとんどは国内向けですが、学校教育関係の上皿天びんは独占状態にあると言っていいと思います。実際は独占しようと思ってやって来たのではなく、他社さんが製造を取りやめてしまった結

果ですけれど。一から材料を仕入れて製造までを行っているのは当社くらいかもしれませんね。計ることは非常に幅広く行われていますが、製造面では非常にニッチな業界かもしれません。

——大きな分銅を作るのも大変だと思いますが、小さな重さを計る分銅を作るのも大変ではないですか。

村上 ステンレス板状の分銅では1mgというものがありますが、薄いステンレスを切る高度な技術が求められます。実は1mg以下の規格にはない分銅も作っています。医薬品の開発段階では分解能が非常に高い秤が必要とされますが、そのレベルの秤には0.5mg、0.2mg、0.1mgといった重さの分銅が計量管理のために要求されます。その素材はステンレスではなくチタンで、例えば0.1mgの分銅に対して誤差の許容範囲は1000分の3mg以下。大きなものでは20kgの分銅がありますが、材料



社員は代表を入れて31名。写真は営業職のみなさん。(前列右から)伊賀さん、川本さん、村上 社長、三村さん、山田さん、堀井さん、中野委員(後列) 金治 部長、(営業の岩田さんは出張で不在)

THE ORK MAN IS HERE オークマン参上

は特殊ステンレスを使い、バフという布で磨き、質量の誤差を限りなくゼロに近づけていきます。これも非常に優れた手業の仕事です。後々の自然摩耗も考え、社内的には15mgのプラス誤差だけが許されています。

正しく秤が使われているか、秤を校正する業務が増えている。

——校正室を拝見させていただきましたが、みなさんお若いんですね。



14年前の本誌の取材の際、校正室でベテランの大町さんから分銅の質量の調整指導を受けていたのが森永さん。今は指導する側に立っている。



お客さまから校正依頼が来た分銅の受け入れ作業をする濱田さん。錆や傷を確認し、校正を行う。傷や薬品による錆は重さを変える要因になる。

村上 現在、製造関係の社員は23名いますが、平均年齢は32.4歳です。すから確かに若いですね。当社の場合、中途採用は基本的にはなく、特に製造部門は新卒のみを採用してきました。先輩から技術を基本から学び、この10年は団塊の世代から技術を受け継ぎ、世代交代がほぼ終了したところ。正確さを担保する高精度な秤や分銅は、結局は職人技に依存しているところが大きいので、技術は大事に伝承していかなければならないと考えています。

——デジタルの登場はどのような影響を及ぼしているのですか。

村上 当社の業務で伸びているのは、例えば1kgの分銅が正確に1kgを保っているかを検査する校正業務です。デジタル秤が正しく重さを示しているかを確かめるのも実は分銅

です。デジタルも分銅も限らない絶対値に向けた挑戦ですから、どちらが上とは言えないのですが、校正業務における世界では分銅が上。フランスに質量定義の元になる『国際キログラム原器』と呼ばれる分銅がありました。それを元にした日本国キログラム原器（現在の呼称は特定標準器）があり、当社もそれを基準に測定してもらった分銅を所有しています。実は昨年、プランク定数と呼ばれる物理定数を基準にキログラムの定義が改定されました。ただ、これは説明が大変に難しいです。難しいことを分かりやすくお話することが本来は大切なのですが、校正業務には分銅が大事という点をご理解いただければと思っています。

——校正業務が今後も伸びていくということですか。

村上 そうです。平成8(1996)年に通商産業大臣から質量区分(分銅・おもり)の認定事業者としての認定を受けました。JCSSロゴマーク付きの校正証明書を業者さんの分銅やおもりに対して発行できる校正業務が開始したのです。100年の歴史から見ますと校正業務の歴史は浅いのですが、質量の測定管理が産業界でも重要になるにつれて校正の重要さも見直されています。

——1996年は私が生まれた年です。

村上 そうでしたか。平成15



研磨室。微妙な質量の調整を行い、質量の誤差を限りなくゼロに近づける。

(2003)年には、日本で初めて質量区分(はかり)の認定事業者としても認定されました。私が当社に入社したのはその翌年のことで、製造部やJCSS品質管理者を経て2011(平成23)年に代表になりました。曾祖父と祖父が経営に携わって55年、引き継いだ父は50年、さらに私がもうすぐ10年目となり、114年続いてきたわけです。

——お名刺に「一般計量士」とありますが、これはどんな資格ですか。

村上 最も知名度がない、のに取得は難しい国家資格(笑)と言われているのですが、秤での適正計量が確保されているかを検査できる資格です。例えば、食品売り場で量り売りする秤が適正かを調べるのはこの資格を持つ人で、当社では3人が資格を持っています。

楽しんで生きている。 それを子ども達に 伝えていきたい。

——お話しは変わりますが、お休みには朝昼晩とお料理をされると伺いましたが。

村上 趣味と言っているのか分かりませんが、大学時代から一人暮らしで自炊が長かったものですから、料理は好きですね。コロナ禍で子ども達が休校の時期は妻も大変だったので、連休中だけです。3食とも私が作っていました。義務と言うより楽しいからですね。もう一つの趣味は車。3人でチームを組んで耐久レースに参加しています。大学も機械工学科だったので、とにかく機械いじりが好きで、機械を触っていると没頭します。軽自動車なのでさほどお金もかかりませんし、車は趣味として奥深いと思っています。バイクには乗ったこともないし、船酔いもするので船もダメですが、車はホント、好

事務所に続く入口に設けられた展示室。「曾祖父の時代のことを詳しく調べ直してみたいと思うようになった」と村上さん。



きですねえ。
——凝り性なのですね。
村上 そうかもしれません。耐久レースに出るためにジムにも週に2回は通っています。ストイックにはまっていると言っていると思います。

この時間は健康維持と一人になれる思索の場だと思っています。妻はヨガや、最近は料理を習い始め、また彼女は小学校の音楽の先生(現在は休職中)なので、子どもにピアノとバイオリンを教えています。二人の共通の趣味はダイビングです。それと、コロナ禍ではまったのは断捨離とふるさと納税。妻と話し合い、季節の果物などを返礼品でもらっています。二人でよく話すのは、楽しく生きていこうということ。私たちが楽



アマチュアの軽自動車耐久レースへ20年近く参戦。3人でチームを組み、レース当日は交代で運転を担当する。ここ10年は岡山国際サーキットで楽しんでいる。車種はホンダのトゥディ。

しく生きることは子ども達が楽しく生きることにつながると思っています。
——素敵なお夫婦で憧れます。そして今日は分銅の校正室などの現場を拝見させていただき、とても勉強になりました。
村上 こちらこそお訪ねいただき嬉しかったです。
——ありがとうございました。



妻の典子さんと長男(小2)と次男(年中)の4人家族。休みの日は子どもたち中心に身体を使った遊びが多い。子ども達の今を大切にしたいという。



料理が好き。家族にも好評だ。得意は中華とイタリアン。